

白

柑
田



白描

行發社造改

昭和十四年二月二十日印刷
昭和十四年二月二十三日發行
昭和十四年七月一日十二版

歌集白描

定價 壹圓四拾錢

著者 明石海人

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七ノ一二

印刷者 椎名昇

東京市芝區南佐久間町二ノ九

東京市芝區新橋七ノ一二

發兌改造社

振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一四番

(所刷印業二社會資合)

目次

第一部 白描

診斷	三
紫雲英野	一七
島の療養所	二九
幾山河	五一
恵の鐘	六一
鬼豆	六七
春夏秋冬	七五
失明	一〇五

おもかげ……………二二七

不自由者寮……………二三五

杖……………二五九

音……………二九九

白 粥……………二八七

氣管切開……………二〇五

第二部 醫

夜……………二三一

天……………二三四

斜 面……………二二六

寂……………二四二

運 晝 譚 年 卷 冴 銷 奈 軌 輒 砌 星

日

.....
二五

.....
二七

.....
二八

輪

.....
二五

.....
二六

.....
二五

.....
二五

落

.....
二五

跡

.....
二五〇

.....
二四

.....
二四

宿

.....
二四

蹴	一
作者の言葉	一
内田守人	一
翳	二七
曉	二五

第一
部

白

描

癩は天刑である。

加はる管しよとの一つ一つに、嗚咽し慟哭しあるひは呻吟しながら、私は苦患の闇をかき搜つて一縷の光を渴き求めた。

——深海に生きる魚族のやうに、自らが燃えなければ何處にも光はない——さう感じ得たのは病がすでに膏盲に入つてからであつた。

齡三十を超えて短歌を學び、あらためて己れを見、人を見、山川草木を見るに及んで、己が棲む大地の如何に美しく、また嚴しいかを身をもつて感じ、積年の苦澁をその一首一首に放射して時には流涕し時には并舞しながら、肉身に生きる己れを祝福した。

人の世を脱れて人の世を知り、骨肉と離れて愛を信じ、明を失つては内にひらく青山白雲をも見た。

癩はまた天啓でもあつた。

診

斷

診断の日

病名を癩と聞きつつ暫しは己が上とも覺えず

醫師の眼の穩やだしきを趁おふ窓の空消え光りつつ
花の散り交ふ

そむけたる醫師の眼をにくみつつうべなひ難
きこころ昂ぶる

言もなく昇永水に手を洗ふ醫師のけはひに眼
をあげがたし

看護婦のなぐさめ言も聞きあへぬ忿にも似る
この佗しさを

診断をうべなひがたくまかりつつ扉に白き把
子をば忌む

踏む階のいたき磨耗にも思ほゆる子等は睡氣
にむづかる頃か

雲母きららひかる大學病院の門を出でて癩かたろの我の何なに
處ところに行けとか

診断を今はうたがはず春まひる癩かたろに墮おちし身
の影をぞ踏む

行樂の人に群れて上野の山に來つれどまた行く
べき方もなく、人なき處をもとめて博物館の廣
庭をさまよふ

在るまじき命を愛をしくうちまもる噴水ふんすいの水は
照り崩れつつ

七寶の太花がめのあをき肌夕かげりくるしづ
けさを冷ゆ

人間の類を逐はれて今日を見る狙仙そせんが猿のむ
げなる清さ

天窓のあかりは高くひそまれる陳列室にひと
りゐがたし

おろそかに見つつ過ぐれどマンモスの化石の
牙は彎まがりたくまし

日暮れて博物館の門を後に、さる夜の夢などを
迎る如く一足毎に重る心は踏みゆく石塊の一つ
一つにもよるべなき愛着を覺えつつ

あるときは世ののぞみをも思ひてし府立美術
館の石壁は黄に

身一つのあらましごとぞ消^けなば消^けね消ぬべく
もあらぬ妻子^{りこ}が縁^{えだし}は

銅像の西郷公は紙つぶてあまた著けたり素足
の甲にも

霧らひつつ入る日の涯はありわかぬ家竝を罩めて灯りそめたり

陸橋を揺り過ぐる夜の汽車幾つ死したくもな
く我の佇む

洗面所の鏡にうつる影は昨日に異ならねど、病み類るる日のさまを思へば、我身ながら已にこの世のものとも覺えず。やがて灯かけ暗き車室の一隅に外套の襟を立てて

今日一日の靴のよごれをうちまもる三等室に
身は疲れたり

子等を妻を木槿^{きぎん}年古^{としふる}る母が門^{かど}を一目を欲りつ
つ歸り來にけり

待てる家妻に言ふべかるあまたはあれど一言に
わが頼を告ぐ

妻は母に母は父に言ふわが病襖へだててその
聲を聞く

うから皆我を嘆かふ室を出で子等の笑^{わら}まひに
たぐひてあそぶ

ありし日は我こそ人をうとみしかその天刑を
今ぞ身に疾む

その後

職を罷め籠る日ごとを幼等はおのおのにも
、我に親しむ

愛垂るる子を離れきてむなしさよ庭籠の餌粟
の殻を吹きつつ

生立ちて情なかりしと我を見むその遙かなる
遷ろひをおもふ

くもあるか
癩かたるわが命を惜しむ明暮を子等がゑまひの殿し

家を棄てて

その前夜

咳くはせくは父が聲なりかかるさへ限りなる夜のわ
が家にふかむ

驛のまへえのきの梢えだにこの曉あけをここだく群れ
て鴉はさわぐ

幾たびを術なき便りはものすらむ今日を別れの妻が手取るも

さらばとてむづかる吾子をあやしつつつくる笑顔に妻を泣かしむ

鐵橋へかかる車室のとどろきに憚からず呼ぶ妻子がその名は

昨日の夜を母がつけたる鮎の鮓のにはふ包は網棚に置きぬ

窓の外はなじみなき山の相すがたとなり眼をふせて
切符に見入りぬ

かのあたり兄が夫婦の住居なる夜汽車の窓を
過ぐる灯ほあかり

檢札のやがて過ぎゆく夜の汽車にあるが儘な
る身を横たへぬ

ゆき交ふや夜汽車の闇にたまゆらに向ひ車室
の灯ふかりはなやぐ

紫雲英野

鬼齒朶

南紀のさる温泉にて療養中、失踪せる同宿の乙
嚙なる若者裏山の奥にて日を経て發見せらる

乙吉がむくろは臭ふ草の上に裕の縞の眼には
たちつつ

遺されし眼鏡に翳をおとしつつあを雲の空高
くひそまる

とりとめて書き遺すこともなかりけむ手帖に
うすき鉛筆のあと

齒朶くわわか葉夕づく岨せまを歸りつつ山蟹のつめ朱
なるを見たり

紫雲英野

紀州粉河の近在に獨居して病を養ふうち、たま
たま子の計に接す。事過ぎて既に旬日の後なり

已^まにして葬^{はな}りのことも濟^はめりとか父なる我に
かかはりもなく

白飯^{しろいひ}を器に盛りてあたらしき箸は立てつつ歎
き足らはず

晝こそは雲雀もあがれ日も霞め野なかの家の
暮れて幽かそけさ

幾年をはなれ棲みつつうつそみのいまはは知
らで罷まふり果てしむ

ながらへて癩かたふの我や己が子の死しゆくをだに
肯うべなはむとす

世の常の父子おぢこなりせばこころゆく歎きはあら
むかかる際きはにも

幾たびをよしと凶しと惧れてし夜の夢さへや
過ぎはてにけり

更くる夜の壁も疊も灯のいろもただしらじら
と我をあざむく

幸うすく生れて死にてちちのみの父にすらだ
に歸らめられつ

あが兒はもむなしかりけり明けさるや紫雲英
花野に聲は充つるを

うは温む水み泥どろがなかに縞赤みき蚯蚓みの仔こらの生あ
れてうごめく

紫雲英咲く紀の國原の揚雲雀はかなきことは
思ひわすれむ

花散るや雙なごぶ仁王あの朱あかのさび今日の一日を暮
れなづみつつ(粉河寺にて)

崩えいづる銀杏いの大木おほき夕づきて灯あかりともりたま
ふ鬼子母觀音

七七忌の日

童わが茅花ぬきてし墓どころそのかの丘にね
むる汝か

ふるさとの家に歸らば今もかも會はるる如き
思ひは歇ます

歸省

各地の療院を轉々すること數年、癒ゆべき望みも失せて歸郷

斯もこそ生立ちにけれ置きて去にしそのかの
吾子かやこの羞むは

年を経て歸る吾家に手童の父とは呼べどした
しますけり

留守の間をみまかりし子の位牌に、享年二歳とあるも、尠く、尋常なる禮拜のわざなど心に染まねば、默然と踵をかへすを母の咎めて、「墓參もかなふまじ、いとせめて香など炷けよ。」と云ひ給ふに

逢見すて過ぎし位牌に香をたくかかるを我の
生れしめてき

縁側の隅の柱に、嘗て手馴れたりし空氣銃の金具もいたく錆びたるが逆さまに吊されたり。「雀の執念なるべし。」など母の眞顔にいひ給ひけるは、我が癩の診断を受けし頃なりき

縁側の壁に彫られし落書も古りし我家に歸り
來にけり

家妻と茶を汲みをれば年を経て歸り來たりし
吾家ともなき

夕經の持佛にむかふ老らくの父が頸はおとろ
へにけり

日を経る儘になじみそめたる子はお八つの菓子
等を頰ちつつ

ふたたびを訪ひてよとねもごろにわが童は我
をもてなす

週日の後国立の療養所に向ふ。この度は歸り見
む日もはかり難ければと、妻は子を伴ひて停車
場まで見送る

母父おちちに手をとられつつ興じやまぬこの幼きを
別れゆかむとす

島の療養所

納骨堂

椿咲く島の御堂の朝たけてせりもちにさす翳
のしづけさ

置く露のつめたきばかりこの朝のつばき白花
もの寂びにけり

朝瀉をわたり來りてきりぎしに高築く石のき
ざはしを仰ぐ(長島神社にて)

醫 局

○
ついたての白布のかげに牡丹の花朱あかにひそま
る内科室の午後

外科室のがらす戸棚にうつりつつ晝をひそか
に雲のゆきかふ

蔦わか葉陽に透く朝を窓ぎはの試視力表はほ
のかに青む

はなし聲しまらく絶えて吸入の湯けむりの音
とみにさやけし

○ 父母のえらび給ひし名をすててこの島の院に
棲むべくは來ぬ

大楓子油

大楓子油は唯一の治癩劑として、週に三回の注射を行ふ

○ 瘡えがてぬ病を守りて今日もかも黄なる油をししむらに射つ

注射針の秀尖ほさきのあたりふくれゆく己が膚はだをまじまじと見る

さる手術に

目かくしの布おほふとき看護婦の眼鏡の玉に
見えし青き空

白 罌 粟

白罌粟を甕には挿せど病み重る友の瞳にうご
くものなし

ほのかに尿ゆまりのにはほひしづみつつ重病室になが
き日暮れぬ

蚊帳ごしの灯ともしにかげをふかめつつ友が寝顔は
おとろへにけり

おのづから遁のがるるときおもひもて重病室の
廊を歸り來く

骨 壺

病棟の夕さざめきをとる灯に死しゆくさへ
や逐はるるごとし

眷^{うかほ}族など來り看護^{みご}らふ者もなく臨終^{いまつは}の際^{きは}に遺
すこともなし

穿てども咽喉の爛れの夜な夜なを腕^{うで}きつくし
て死にゆきにかり

いやはてに面をおほふ白木綿はまなこに沁みてあたらしきかも

亡骸をおくり來りて月あかき解剖室に讚美歌をうたふ

この朝を友豊彦が骨あげの笛吹きならす山の火葬場に

繰返す聖歌ながらに手向けゆく黄なるコスモスは柩の上に

小包に送らるるてふ豊彦が遺骨の壺はちひさ
かりけり

静養病棟

石壁のかこむ空地の晝の空にまたま松の花が
らの降る

洗面器の昇汞水は紅^{べに}褪^あせてさかしまにうつれ
る三角のそら

狂^まひたる妻をみとりて附添夫となりし男は去^こ
年^{とし}を死したり

石壁は肌あらあらし尋め來つるこの島の院に
きちがひも棲む

監房に罵りわらふもの狂ひ夜深く醒めてその
聲を聽く

盆踊り

いちやうに朱あかの花笠ひるがへす盆の踊りのは
なやぎ寂し

大きなる踊り花笠もてあますをさな女め童わらわの手
ぶりは愛あなし

見のこして盆の踊りを歸り來る渚の路に水く鷄ひな
鳴きしく

追
悼

看護婦奥山姉を偲びて

八木節の囃子はつしかなしく舞ひし夜の衣きぬの綾さへ
眼には残るを

大楓子油注射のときを近づきてマ覆フの上に黒
む腫れなりし

補助看護

重病室には附添夫あれど、徹夜の看護を要する者には、島人の全員半夜づつ交代にてこれに當る

交代の言葉を言へば目をあげて看護らるる人も我を見まもる

相知らぬ我に一夜をみとらるる人の眼蓋の皺だちを見まもる

壁の上に時計の音はうすれつつしまらく私の
ねむりたるらし

窓の空しらみそめたり藤棚も海面の明りもお
ぼろおぼろに

補助看護の一夜ひとよは明けて枕邊まくらべのスタンドの灯
の黄ばめるを消す

夜すがらの看護を了へて降りたてば壁の葛かづらの
露のしづけさ

病める友

日々の主食は麥飯なれば、祝祭日に給與さるる
「白飯」は島人の珍重するところ、或はお萩海苔
卷など相應の趣向を加へて賞美す。白飯の他の
馳走は小豆を煮潰して作れる田舎汁粉にして、
會食饗應はもとより、三三九度も之に祝ふ

かたる等は家さへ名さへむなしけれ
白米の飯
を珍しらに食む

島の院の祝言の宴に招かれてを
とこをみな
の性
をさびしむ

×

歸省の日間近き友とむかひつつ灯^{あかり}ともして夕
の飯食^{いひを}す

消燈ののちのしましを友が語る墓廊^{シシヤユ}のこと巫^ユ
女の婆のこと

註

シンヂユ、ユタはいづれも琉球の言、ユタとは口寄せ、呪な
どを行ふ女のこと。墓廊、館女の漢字は意味によつて假に
當てたもの。

ある人に

事すぎて良しと悪しと罵れど時にあたりて身
は捨てがたし

ソクラテスは毒をあふぎぬよき人の果は昔も
かくしありけり

面會の父なる人にあらたまる若き室人の言を
聞きをり

癩に住む島の作業に木を植ゑて安らぐ人の言
にしたしむ

×

まともなる問答ものうく神憑りの翁が言の合
間をうなづく

八百萬の神々己れに憑つくとなすこのかたくな
は悔り難し

幾
山
河

夜
雨

醒めきては涙をぬぐふこれの眼に悔くしくも見
き父が臨終いまはは

再びをまどろむ夢にさむざむと父は眼を瞑ち
てるたまふ

夢なりと思ひすつれど老おいらくの父が便りの絶
えてひさしも

またさらに老いたまひけむ夢見しは別れ來し
日の面影なりき

父の訃

文殻をたたみ納めてしまらくの思ひはむなし
歎くともなく

白ふぢの鉢のまへにて言はしける別れ來し日
の父が眼まなざし

送り來し父が形見の綿ごろもさながらにして
合ふがすべなき

今日の訃の父に涙はながれつつこの悲しみの
ひたむきならぬ

父ゆるゑに臨終いまはのきはのもの言ひに癩かたろの我を呼
び給ひけむ

青蜜柑剥きつつ思ふ叱られて幾たび我の父を
うとみし

盆栽の蜘蛛をとらへて傍へなる軍鶏しやもにあたへ
き太き指なりき

面會

偶々^{たま}を逢^{たま}ひ見る兄が在りし日の父さながらの
ものの言ひざま

事ごとに我の言葉をさからはすたまたま會へ
ば兄の寂しさ

面會の兄と語らふ朝なぎを青葦むらに波のた
ゆたふ

うすら日の坂の上にて見送れば靴の白きが遠
ざかりゆく

夕あかる室の空しき歸り去いにし我兄せの聲は耳
にのこりつつ

音たてて蟬はた斬はたひとつ飛びにけりあれののぎ
くおどろがなかを

朝日トーキーニュース

ゆくりなく映畫に見ればふるさとの海に十年
のうつろひはなし

兄も弟もひねもす呆けし潮あそび日焦童の頃
の戀ほしさ

遠泳にめぐり疲れしかの島に光りくだくる白
波が見ゆ

我のごとわが子も遊べ飛の魚のかの瀬の鼻を
翔くるはあらむ

かの浦の木もく槿ひ花咲く母が門かどを夢ゆめならなくに訪
はむ日もがな

寫 眞

井戸端の梅の古木に干されたる飯櫃おひつも見ゆれ
わが家の寫眞に

吾子わがこが佇たつ寫眞の庭の垣の邊に金柑の木は大
きくなりぬ

ありし日を父が愛めでにし金絲雀かざりは飼ひ遣され
て今も鳴くとか

惠
の
鐘

惠の日に

皇太后陛下の御仁徳を偲び奉りて

そのかみの悲田施薬のおん后いまを坐ますがに
をろがみ奉まる

みめぐみは言はまくかしこ日の本の瀬者に生あ
れて我悔ゆるなし

恵の鐘

鐘銘には皇太后陛下の賜へる
つれづれの友となりてもなぐさめよゆくこと
難き我にかはりて
の御歌を刻み奉る。昭和十年十一月二十日撞初
式を行ひ、爾來明六つ暮六つの鐘は日毎に長き
餘韻を島里に曳く

唱和する瀬者一千島山にめぐみの鐘は鳴りい
でにけり

今日よりぞ明暮に鳴る鐘の聲日毎日ごとの思
ひには聴かむ

恩賜寮

曉^{あけ}至^さるやまづ日のあたる光が丘の南おもて
に 疊なす薨^{かぶつ}の翠 白珠の壁に照り映え 眞
木香る簷^{のき}をめぐりて 聲近しみめぐみの鐘
波光る播磨^{はり}おほ灘^{なみ} 月に浮く小豆島山 高窓
の眺めゆたかに 潮足らふ瀉^{ひた}を蘸^{ひた}して 春の
日は躑躅咲き竝^なみ 夏の夜は水鶏^{みな}啼きつぎ

白萩の年の深みを　渡り來て鴨の群れ飛ぶ
これは惟こゝろ　大宮のおほみ後の　朝夕あすの御膳みかじはの
料しやう　約つづめさせ賜へる家ぞ　身ひとつの疾むに
甲斐なく　父母の家をはなれて　人の世の涯
なる島に　老いゆかむ乙女の子らの　乙女さ
び住みなす家ぞ　朝潮あさうしほに明けの鐘　夕潮ゆふうしほに暮
れの鐘　磯千鳥聲のさやかに　玉の緒いとの清すむ
べき家ぞ　恩賜寮これは

鬼

豆

木魚

去る年の秋石井漢氏來園せらる。氏は木魚の音を愛でて屢々伴奏に用ひ、時に自ら之を拍つて門弟の踊るに和す

踊手に木魚打ちつつ見入る漠のまなこの光喰
ひ入るごとし

點光に影をみだして踊る漠の素肌の胸を汗は
したたる

芝居

患者にて組織せる劇團を愛生座と呼び、春秋二回の芝居日には近村よりの來觀者に賑ふ

喜多八が關西訛りに啖呵をきる癩療養所の芝居たぬしも

會堂の宵のぬくとさ飛びありく童の聲も憎からなくに

除夜

年祝ほぎのよそほひもなく島の院に百八つの鐘
ただ静かなり

鳥山の鐘の撞木の丈たけながの綱手の垂れに朝は
風ぎつつ

元日をきたる年賀の文ふたつうちのひとつは
ふるさとの子より

追羽子の音もあらず元日のこの静けさをひ
とり籠らふ

宵の間の疾風は落ちて枯庭に霜は降るらし月
かげり來ぬ

砂濱にむしりすてたる白き羽毛のしづけさ深
し陰冷えつつ

鬼 豆

春未だ木草は萌えず寂び寂びと葉枯れ齒朶山
日にしらみたり

縁あかきランプの笠も母が聲も熬いる鬼豆の香
に匂ひつつ

沈 丁 花

三浦環女史を迎へて

きざしくる熱に堪へつつこれやか
かの環が聲を
息つめて聽く

沈丁のつぼみ久しき島の院に
「お蝶夫人」の
うたをかなしむ

春
夏
秋
冬

春

裏山の齒朶のつもり葉ふふませて昨日も今日
も雨のけむらふ

轉まびるる枯齒朶山の日だまりに近づく聲は大
瑠璃るりのたぐひか

鳶二つ舞ひもつれつつ草丘に晝の陽あしはう
つるともなし

うつらうつら眼まな下した海うみに照り翳る春日のうつろ
ひ見つつ遙けさ

海寄うみの風かぜに堪たへつつ閑しづかなりさくら一むら晝
をかがよふ

坂道をくだり來つれば薔薇苑は香に籠りつつ
うすら日の照る

いつしかもミシンの音はやみてをり立藤のは
な黄なる曇りに

いたむ眼を思ひつつ來る温室に護謨の芽だち
の紅あはあはし

簀を洩るる陽縞うすれて幽かそけさや朱あけの牡丹の
花びら寄りあふ

花びらの白く散りしき牡丹の影一むらにほふ
夕日のながさ

柿わか葉一日ののびの夕あかり湯屋の廂に羽
蟲は群れつつ

ヒヤシンス香にたつ宵は幽かなり眼のいたみ
さへ夢に入りつつ

囀^{まへづ}りのこゑはあかるき板縁に猫かのこせる昨^ま
夜の足あと

暮
春

歸り來て人の語るは死顔に刷はきし化粧の清か
りしこと

骨あげにしばし間のあり火葬場の牡丹ざくら
に蜂は群れつつ

訪おとへなば日暮るる縁に佇みて友はしまらく亡き
妻を言ふ

松 籟

内務省衛生局豫防課長として、歌集『銀の芽』の歌人として我等に親しき高野六郎氏、「惠の鐘を撞きに」と來園せらる

「屎尿屁」の筆のすさびに親しもよ課長の大人
は嚴いっふしかれど

賓人まいるの撞まき給たまふらむ高鳴るや鐘の響はほがら
ほがらに

泰山木

鹿兒島縣星塚敬愛園長林文雄先生の御慶事に
— 新夫人大西ふみ子先生は曾てこの島の醫官た
りき

しら花のたいざん木は露ながら空のふかきに
呀えあかりつつ

樂生病院以來病める我等の第二の母として喜び
をも悲しみをも願ち給ふ人に

いつの日かわが臨終は見給はむ母とたのみつ
つこの人に頼^まる

波

きりぎしの坂を越ゆれば松の秀ほにうねりは濶ひろ
き眞晝あを濤

梅雨霽れの岸邊をさして沖つ浪崩れつ湧きつ
ひた寄りに寄る

登りきて見放さくる沖のかくり岩うねりうねり
を見えて泡だつ

夏 至

演習のやがてはじまる松山に夏うぐひすの聲
しづかなり

萌えいづる檜ひのきの白芽に降る雨は匂ひあたらし
音ねのあかりつつ

×

暮れのこる土の乾きに甘藍は鉛のごとく葉を
垂らしたり

夕焼の雨にかならしひとときを簷のきさきに鳴く
一つ青がへる

厠戸のひらき重たく降る雨のやみ間を黄ばむ
夕空あかり

夕まけて芭蕉わか葉にやむ雨は砌みぎりの石に乾き
そめつつ

盛 夏

罨あん法はふの湯をすてしかば窓下の日蔭の土を蠅の
群ぐらだつ

たてこめて茵しげはにほふ暮々を募る暴風雨あらしに蠅
一つ飛ぶ

風鳴りは向ひ木立にうすれつつ夕べを鳶のこ
ゑ啼きいでぬ

立 秋

庭さきにさかりの朱あはをうとみたる松葉牡丹は
うらがれそぬ

揉む瓜のほひうすらに厨邊は秋立つ今日を
片かぎり來ぬ

白楊の梢にたかきうろこ雲夕あかりつつうす
れゆくなり

×

夕風ぐや眼まな下した瀉たにしづむ日の光みだして白魚はくぎょ
跳びしく

あかあかと海に落ちゆく日の光みじかき歌は
うたひかねたり

秋

煙突の黄なる鑛石船ひとつゐて起重機のおと
朝漉に鳴る

地ならしの丹土の下に秋草の萩も桔梗も埋も
れてゆきぬ

人の世の涯とおもふ晝ふかき癩者の島にも
音絶えぬ

紙うらに滲じじみてかわく墨のあと深夜ふかよをもの
聲は絶えつつ

暮れおちて冷えさし來きたるひむがしの窓をま
もに月さしのぼる

拍 手

園長光田健輔先生の還曆祝賀會に

緋の頭巾緋の陣羽織童めく園長におくる拍手
ひとしきり

ひたすらに癩者療救の四十年わが園長の今日
をたふとむ

樂

隣舎より聞えくる放送の調べを縁に出でて聴き
つつ

ことごとく夜天の星はまじろがずエルマンが
絃高鳴りわたる

人間が鳴らす音色のかくばかりかなしかる夜
を星はひそまる

ベートーベンの第九交響曲を聴きつつ

うつそ身は聴き澄しつこの樂の鳴りかはす
間も尿ゆまりかもすを

死ししゆかむ夜のかくもこそ合唱シムフオニイ
やみて遙かに月しろのさす

姪

これの世を短き命ひたぶるに聰まふしくもこそ汝なれ
の生きしか

汝なが描かきしうろくづの繪えに白菊はくきくのまだきを剪き
りてはるかに悼なげむ

蟋

蟀

一夜高熱を發し、後、數日の昏睡の間を、現れては消えし幻影の幾つ

更くる夜の大氣ましろき石となり石いよよ白く我を死なしむ

天井の白きにひろがる雨もりを妻子眷族のよりにてなげかふ

しんしんと振る鐸音に我を繞りわが眷族^{うから}みな
逐はれて走る

煉瓦塀高くめぐらす街角に聲あり逃げよ逃げ
よといざなふ

息つめてぢやんけんぼんを争ひき何かは知ら
ぬ爪もなき手と

繰りかへし我の齡^{よほ}をかぞへる壁のむかうの
聲ならぬこゑ

身一つの置き換へらるるおそれより己が名を
彫る壁にのぶかに

柱時計三時をさして日のあたり厨の音はもの
刻むらし

死にかはり生れかはりて見し夢の幾夜を風の
吹きやまざりし

かつてなき光なり朝の空の暗れ幾日幾夜の昏
睡を醒めぬ

床下に一つゐて鳴くこほろぎの聲のまにまに
死にかはり來ぬ

冬

見慣れたる電信柱たふされて窓さきの空今朝
を冬めく

前栽に菊菜つみつつこの頃をおこたる母への
便りをおもふ

日あたりの病舎の縁にひびきつつ午後の作業
は石を研^きるらし

門さきに冬木の影のしづかなる入日のなかを
歸り來にけり

陽あたりは移りつくして紙障子ほの青みつつ
冷えのさしそふ

サンルームの壁に斜めに日のうすれ夕べはさ
むしものの焦げつつ

x

降りいづる雨あし暗き日の暮れを相撲放送の
聲あわただし

図書室の灯は高く更くる夜の玻璃戸の闇を氷
雨降りつぐ

壺

網

我室の窓の下十歩にして海なり。涯は六合を繞る潮も、この島の入江ふかく入り來たりては、海とよりは池なり、池とよりは泉水なり。しかも、四季晝夜のわかちなく漁師等來りすなどる。或は半夜舷を鳴らして魚を逐ひ、或はささやかなる發動機船を動かして來りて、魷イカの如く張りめぐらせる壺網てふを揚げ、夜の間を迷ひ入りし小魚の末をま

で漁りつくす

海よりふなほたに舷ふなほたたたく音さむしこの夜のふけに何を獲るとか

蘸衾ひぶすまかづき臥す夜を蚕あまの子はすこやかなれや
すなどり叫ぶ

この朝も石油の料しろうに足らずよと芥のごときを
舟に投げこむ

なりはひの險しきを言ふ蚕あまの老つくづくと見
て我儕われらを羨うらやましむ

失

明

夜盲症

遠からぬ路べりの灯の見えわかず鳥目といふ
も身の衰へか

消えのこる肝油の臭ひは悪^{にく}めども鳥目すらだ
に癒え易からぬ

角 膜 炎

角膜の白濁次第に募れば、軟膏塗布も結膜下注射も瞳孔切開も角膜剝離の手術もすべて甲斐なく

近づきてその人ならずおろそかに向けしゑま
ひの冷えゆく暫し

盲ひくれば人の眼色の辨わきがてに或あるはよしな
き物言ひもしつ

角膜の濁りはすでに披きつつアルバムにさへ
親しみがてぬ

降る雨の日暮はさむしあはあはと壁のよごれ
に灯は滲みつつ

暗室

ふかぶかたととざす眼科の暗室に朝は炭火の
ほひ籠らふ

照明の光の圏にメスをとる女醫の指さしゆびのまろき
を見たり

眼神經痛

しづかなる友の寢息やいつしかも盜汗ねあせの衣きぬの
更ふべくはなりぬ

更へなづむ盜汗の衣にこの眞夜を戀へば遙け
しははそはの母は

夜すがらの眼のいたみをまもりきて曉はやき
囁りを聞く

まじまじとこの眼に吾子を見たりけり薬に眠
る朝のひととき

おぼろかに器の飯の白く見えてをだやむいた
みに朝を過すしぬ

聽診器のややに冷たき肌ざはりたまたま障子
に陽の明り來ぬ

失明

眼神經痛類に至る。旬日の後眼帶をはづせば已に視力なし

拭へども拭へども去らぬ眼のくもり物言ひさして聲を呑みたり

くもる眼をみはりつ瞑ぢつ直心ひたごころやうやくにして黙居もだみに堪へず

いつをかはこの眼の明りの還るべく思ひたの
みて 因被しんかづきぬ

眼帯にやがてをぬるむあぶら薬かくてぞ我の
盲しひはてぬらむ

晝も夜も疼きつくしてうつそ身のまなこ二つ
は盲ひ果てにけり

眼も鼻も潰つぶえ失うせたる身の果にしみつきて鳴
くはなにの蟲むしども

また

我のみや癩に盲しふるにあらねどもみはる眼に
うつるものなし

幾人の友すでに盲ひいまは我おなじ運命さためを堪
へゆかむとす

惧れこそひさしかりしか盲めしひての今朝はしづ
けき囁りを聴く

ひとりなる思ひに耽る眼のあらば妻への便は
ものさむ夜よを

お
も
か
げ

鳶の輪

下村海南先生を迎へて

首あげて盲の我のうちまもるおん顔と思ふ聲
のあたりを

しまらくも都の風^{かぜ}りは忘れませ鳶啼く島に晝
のながきを

消 息

時々の遷りかはりを細々と報せくる母が便り。
猫板に巻紙を展べて書かすらむ姿の目にうかみ
ては、假名文字の一つ一つ金泥の經文にもまさり、
盲ひ來りては傍ら人の匆卒に讀みさる一字一句
にもしろがねの鍼もて打たるごとく、父の計、兄
の病、子の生ひ立ち、さては庭の葡萄の實りまで、喜
びも悲しみもやがて聲なき歎息の幾たび。絶え
て久しければ胸さわぎ、披きては其の後をうち案
じ、いづれも歎きならぬはなし

をりをりを思ひいでつつ見えぬ眼に母への便
りを今日も怠る

音信おとづねの今日はありたり老おいらくの母が言葉はな
がからねども

亡き父が三めぐりの日の落雁も母より届く小
包のなかに

友が言ふあや目を眼にはうかめつつ母より届
ける衣きぬを被かきぬ

この頃を便り遠のく兄が家はつつがなきらし
金かね絲わり雀すずめども

おもひで

秋雨の晝をこもりて抽斗ひきだにふるき象棋しょうぎのこまも
見いでぬ

天井に洋燈の灯かげ圓くさしわが弟は生あれる
たりけり

その翌あつの弟いろとが頬ほのはからざる冷たみを吾がひ
とり畏れぬ(弟急死す)

餘のことの覚えはあらね棺をとちて泣きたま
ふ母を父の咎めし

石の面に彫れば冷たき弟が名やわが世の翳ぞ
かくも兆しし

弟が死にゆく夜をねむり呆けし我をある日の
母の言はしつ

さ庭なる核なし柑子のよき熟れは母が昨日の
便りにありき

茶器棚のけやき戸の理りのみだれさへ母を憶へ
ばつばらつばらに

面會に來むとのたまふ老母を道の遠きに我い
なみたり

俳 (その一)

病む我に逢ひたき吾子を詮ながる母が便りは
老い給ひけり

遡る記憶のはてにむなしかる父我ならし逢ひ
たかるべし

目にのこる影はをさなし離り住む十年の伸び
は思ひみがたし

父我の癩を病むとは言ひがてぬこの偽りの久
しくもあるか

すこやかに育てばまして歎かるる幼き命わが
血をぞ曳く

思ひ出の苦しきときは聲にいでて子等が名を
呼ぶわがつけし名を

天刑とこれをこそ呼べ身ひとつにあまる疫^{えびみ}を
吾が子に虞る

歌がるた

夕はやき臥床かたどにをれば 松の内今宵かぎりと
隣間に遊ぶ歌がるた 「久方の光のどけき春
の日に」 讀む聲も拾ふ聲も ほればれと興じ
さざめく 源平合戦坊主めぐりと ありし日
は我も遊びき 熱に臥す夕くらがりしに 盲しひ
し眼を見ひらきをれば 歌がるた歌のあまた
の 歎きさへ いにしへ人のめでたかりにし

曾遊

ひとしきり跳ぶや海豚いるかのひかりつつ朝は風ぎ
たるまんまるの海

揺れやまぬ檣ぼしらの秀ほに掃はかれつつひときは明き
は何の星かも

×

大陸の彼處にをはる夕あかね古りし砦は海の
涯に見ゆ

×

富士が根の萱生高原うちわたす空の涯より風
つぎわたる

國二つ此處に分るるすすき原蛇干す家村を覆
ふ空の蒼

かへり見る檜原の涯のひとところ山中湖は暮
れのこりつつ

×

あまねかるその名はあれど古への彫師が遺す
猫のさびしさ(日光)

瀧壺は霧しぶきつつ轟けり踏まゆる巖根もと
どろとどろに

瀧つば路還り來つれば日のひかり白樺むらは
筒鳥のこゑ

×

アカシヤの並木花咲く夕ゆふばかり古ふるき驛うきやのかな
しきはなし(紀州粉河)

河はらに白き傘干す冬日ざし堰の網あみ代しろは曝ひれ
乾かわきつ

俳 (その二)

別れ来て十年にあまるこの頃を妻がたよりは
かたじけなしも

朝粥のうすきにほひに思ほゆるひさしき年を
離れ棲みにけり

あらぬ世に生れあはせてをみな子の一生の命
をくたし棄てしむ

地獄にも墮ちなば墮ちぬ我爲に孤ひごりをまもるを
みな子は愛ちし

癡ちすでに盲しひつくしたるおとろへに妻をしお
もふ居むかふがにも

糊くち口すまのその日その日にわが知らぬ小皺せうしわもさし
て嬌うつくさぶらむ

人づてにものす便りは吾妻あづまにもただ健たけかにる
よとのみこそ

梨の實の青き野徑にあそびてしその翌ちげの日を
別れ來にけり

子をもりて終らむといふ妻が言身にはしみつ
つ慰まなくに

健けきをの子の偕ごにあり經へよと言はるるもま
た寂しからまし

不自由者寮

轉居

入園以來六年を過したる室を出でて、不自由者寮に入る

轉室の挨拶をかはすこの人と壁をへだてて幾年なりけむ

父の訃はここに讀みけり夕はやき窓を開けば水鶏遠鳴く

引越しの荷物もちだす縁さきに盲の我はとり
のこされぬ

手傳人わが事のごと振舞へりをかしきやうに
て笑ひ難しも

手さぐれば壁にのこれる掛鏡この室にして我
盲めくらひけり

慰問品

盲人その他起居の自由を缺くものを不自由者と呼び、附添夫をして衣食の用を辨ぜしむ。附添夫も病者にして輕症のもの之に當る。不自由者には月々慰問の品を給與せらる。

不自由者となりはてぬれば己が名に慰問の餅も届けられたり

手にのせて重りごころもわりなけれわが名に
いたたく經木包は

齒にしみて慰問の餅の冷えなすも不惑には至
らぬ命なるべし

世の中のいちばん不幸な人間より幾人目位に
ならむ我わが儕らか

己にはさまで不運ならぬかに思ひてゐるも不
自由者我は

立 春

降りたちてなじまぬ下駄のおもみにも籠れる
冬は久しかりにし

友が讀む書を聴きつつあぐらゐるの寒くもなれ、
ば因しほに歸る

鳴き交すこゑ聴きをれば雀らの一つ一つが別
のこと言ふ

日あたりの暖かからし雀一羽窓さきに居てい
つまでも鳴く

やむ雨の宵あたたかかし前栽の冬菜はやがて蠶たう
にたつべし

○ 雨一日訪ふ人もなく夕暮れて埒なだちすすめは鳴き
ひそまりぬ

縁にゐて夕べはどよむもの音の寒からぬほど
の春にぞありける

晩 春

目ざむればほのかに明き室のなかたまたま昨夜はよく眠りたり

簷^{のき}さきに聲けたたましこの朝を雀らの世に事のあるらし

暮六つの鳴りて間のある空明りおこたりひさしき浴^{かあみ}思ほゆ

熱に臥す面にまつはる蠅ありて夕餉ののちの
明りひさしも

臥てをればひびきは遠き船の笛かかる夕べの
幾たびなりけむ

夫婦舎に移れる友に贈らなむ花がめの肌到手
を觸れてをり

五月雨

放送の豫報ものうく葉ざくらの日本ぢゆうに
降る雨ならし

今をある運命さだめは知らず努めしをあだなりしと
はつひに思はず

入學試験合格の日の空のいろこのごろにして
眼には冴えつつ

前裁につぎて色づく枇杷いちご聞きつつ母の
便りたぬしも

粽

紙鳶の糸のもつれに苛つ 我の掌に 蒸しな
すや粽賜びにし とある日の母が面影 むら
さきは手絡なりしや 昨夜父といさかひ給ひ
き 手に温む粽剥きつつ あやしくも頬をほ
てらせ 童我こよなく羞ぢける 遙かなりけ
り この島の院に盲ひて頂く 不自由者慰問
の 餅の匂ひ葉剥きつつ憶へば

剝くからに柏の餅の香に匂ふ頬赤童のこの日
かの日は

結ふ髪の毛のさやけき母を童わが見つつひそかに
たのしかりしも

いまだきに生ひし白髪を染め給ふある日さび
しき母を見にけり

湯浴する母が乳房に黄ばみたる皺のたるびの
まぎまぎと見ゆ

彼

竝な今にしておもへば彼ぞ癩かなりし童のわれと机
竝なめしが

彼かの指に癒やえては破やれし傷一つ今にして且つ
眼にはうかみ來く

わが病あるひは彼に受けたらむ童わらはべの日のしか
も親しさ

我^{わが}疫^{えん}童^{どう}の日にこそ受けたらめふるさとの吾子
よ病むな傳染^{うつ}るな

わが病むも彼ゆるゑにかも思ひいでて或は疎み
あるひはいたむ

清書

送り來し吾子が清書は見えわかぬ相逢ふがにも涙のにじむ

母を訪はむ春の休暇を待ちわぶる吾子の童の文は聞きをり

相會ひて妻子二人のむつむ日を夕くらがりの臥床に思ふ

夜の夢に笑まひて消えし眼^{まな}差^ざしの思ひを去ら
ず寒き日すがら

小春日

歸省する友を送りて

偶々たまに秋の日なたまかを降りたてば眼にはうつら
ね空のはるけさ

歸省する人を見送る砂丘に晝を鳴きつぐこほ
ろぎのひとつ

この浦をかくて往きにし幾人の遂に還らすそ
の誰彼は

家なりし噴井の音はわすれつつこの島にして
命をはらむ

發動船の音遠ざかる砂丘の秋日のぬくみ肩さ
きにしむ

大掃除

大掃除を避^よけて籠^{かご}らふ火葬場の晝をしづかに
うぐひすの鳴く

大掃除の縁に汲むなる茶のはしら家なりし日
の斯^かるもありき

おほ掃除すみてひろらにわが室の疊の上を風
の吹きぬく

疊
替

話好きなる疊師の翁も病者の一人なり

疊師の悔むともなく言ひつるは惜しみなくす
てし藥料のこと

ふるさとの海にゆたけき漁を言ふこれの翁は
酒の好きとか

弟子などは足手まとひと膠にかもなき老の訛りも
その人ならし

言ひ据ゑておのづからなる訛すら職に老いた
る頑かたくなの好き

ながからむ世すぎの料しやうに習ひてしその職に居
て島になじむか

瀬に住む島に盲めくらひて秋一日替へしたたみをあ
たらしと嗅ぐ

ともしくも残る月日かはぎ替へし今日の疊の
にほひ身に沁む

疊がへすみてはめこむ紙襖友ははげしき夕映
を言ふ

清^{すが}むしろにほへる部屋の壁ぞひに白き茵^{しげん}をの
べて長まる

杖

潮音

醫官内田守博士は守人と號し、水廻社同人として
歌道にも練達の人、公務の傍ら寸暇を惜みて療養
短歌の普及に盡瘁せらる

時ありて言ことばにもたがひ癩者我れ癩を忘れて君
にしたしむ

衰へし命のはてはこの大人おとなに頼たのり縊りつつ安
らがむとす

菊

醫官小川正子先生病む

この島の醫官が君の少女なす語りごとこそ親
しかりしを

かりそめに病み給ふにも秋のはやさ庭の菊は
香には疲びつつ

南京陷落

日支事變酣に職員看護婦など相つぎて出征す

世は今し力を措おきて事は莫なしますらを君を往
けと言こと祝ほぐ

顧みて惧れなけなくに盲我戦況ニユースをむ
さぼり聴きつつ

南京落城祝賀行進の日取のびて固くなりたる
饅頭をいただく

島にも防空演習の行はれて

鳴りいづるサイレンに次ぐ非常喇叭やがて外
面に足音さわぐ

秋 逝 く

あたらしき足袋のこはぜはかけがてぬ窓さき
に來て百舌もずの高鳴く

秋ふかき晝のひそけき膝にくる猫にむかひて
物言ひかけぬ

膝に來て眠る仔猫のぬくもりのそこはかとな
き雨の降りつぐ

さ夜ふかく目醒めてをればさしなみの隣の人
の欠伸するこゑ

仔の牛がバケツなりしを飲みほして配給の乳
今日は來らず

幾年をかくてありけり盲わが起き臥す窓のす
すめ子のこゑ

曆

疼む腹は暫し間のあり更くる夜の玻璃戸に凍
みて雨の降りつぐ

疼む腹は撫であぐみつつ俯伏して或は宵の秋
刀魚を憎む

足袋のまま眠るならひをこの夜は寢返る度に
思ひかかはる

やがて薄らぐいたみに、童の日の事などとりとめ
もなく思ひいでては

三りんぼう天一天上壁の上のこよみは奇あやし生
きもののごと

きのへ子わの宵の炬燵の物語り父のあぐらの酒
の香に聞く

霜

年ごとのおとろへはあり片寄りによれる敷布
を展べつつ思ふ

黒き蛇飛びかかるとき目醒めたり深夜を乾かぶ
痰に咽せつつ

夜すがらを脊柱の冷え夢に入りうつうつと聞
く一時二時三時

親しきが一人一人に失せゆきて今はこの身の
待たるるごとし

風邪ひかば息塞るとふ喉の腫れに夜毎をしみ
て冴えのまさり來

灯

山田信吉君は琉球の人、我爲に眼とも手ともなり
て衣食の事はもとより煩瑣なる草稿の整理まで
一手に辨じたりしを、かりそめの病に急逝す

隣室にも音のする夕暮を晝餉のすまぬひも
じさに居り

今朝は我に箸も添へしを君が往きし重病室に
灯ともる頃か

病室に君危篤なり午前二時人みな往きてあと
のひそけさ

くらがりの褥しざんに膝をただしつつ君が命をひた
すらに禱のむ

×

×

夕暮の臥床に聞けば君を焼く火葬場にたつ讃
美歌のこゑ

春はやき蚊の聲ありて信吉の灰となりゆくこ
の夜は深む

遣されし机の板の冷たみに頬をあてつつ涙の
ごはす

この秋は歸省して母を見むと言ひるたりしを

身に著けて歸るべかりしその衣きぬは遺骨の壺つぼに
添へて送らむ

杖

事ともなく往き來なしけるこの道も杖の先には
搜りわづらふ

搜り行く路は空地にひらけたりこのひろがり
の杖にあまるも

泥濘どろに吸はれし沓くつをかきさぐるめしひ盲めしひにこそはな
り果てにけれ

杖さきにかかぐりあゆむ我姿見すまじきかも
母にも妻にも

さぐり行く裏山路の曉あけの空晴れたるらしもさ
へづりの澄む

×

杖立てて佇みをればしたしさよ誰彼の聲の言
ひかけて行く

聲かけて傍へを過ぐる足音の一人一人をおも
かげに繰る

路べりに杖を立てつつ朝まだき入江にはやき
爆音を趁おふ

ひとしきり葦生をわたる朝あらし眼を睜りつ
つ聴きとめにけり

夢

人なかに行きあひし父を夢ながらなほざりに
見て思ひにのこる

命はも淋しかりけり現ましくは見がてぬ妻と夢
にあらそふ

草餅

愛國婦人會岡山支部より草餅を贈らる

春なればよもぎの餅も食^たうべよと添へて賜は
る言^{こと}のよろしさ

霞たつ吉備^{きび}の春野の若よもぎおよび染めつつ
摘ませけらしも

音

聲

ヘレン・ケラー女史の放送を聴く

放送のこの人の聲を島の院に盲^しひつつ聽けば
なみだし流る

我が手足の麻痺症状のすでに久しきを思ひつつ

この語る聲も言葉も悉く皮膚より得てしその
皮膚のよさ

前 裁

① 盲^{めくら}ひてはおのれが手にはつくらねど庭のトマ
トの伸びをたのしむ

偶々^{たま}を訪ひ來し聲は前裁のトマトの伸びのよ
ろしきを言ふ

盲^{めくら}わが臥^ふりてをれば庭さきのトマトを盗^{ぬす}む足
おとのあり

音

讀書きに借らむ人手をおもひつつ縁に夕づく
物音を聽く

盲^{めくら}ひてはもののもしく隣家に釘打つ音を
はるまで聞く

行きすぐる足音幾つ我家をめぐりて夕べのど
よめきに入る

いささかの嘔はき氣去りやらぬ午さがり隣のラヂ
オ靜かに鳴りつぐ

窓先に足音の來て夕まぐれ木草の立たちに水そそ
ぎをり

朝たけし室のかそけさ手搜りに窓をひらけば
また音もなし

歌

夜すがらを案じあぐめる歌ひとつ思ひにはあ
り朝粥の間も

息の緒のよりて甲斐ある一ふしの豈なからめ
や盲^{めくら}ひたりとも

葦の葉を捲きて鳴らして朝明は一生^{ひきよ}にきはま
る命おもはず

白

粥

蛭

夏立つや夕べをはやき麻^{あさ}蛭^がの去^こ年^ぞのほひに
しみて轉^{ころ}臥^がす

水^く鶏^{ひな}の聲遠のきてをりをりに麻蚊帳のすそ疊
をすべる

ときをりを枕邊に来る蚊のこゑの一つ二つの
打ちかねてけり

路 樹

立ち出でて路樹四五本のそぞろゆき暑しと言
ひつつ我の息づく

伴れられてあゆむ木蔭は肩さきに照り翳りつ
つ朝の日暑し

坂路を登りつめしも大儀さよ潰えし咽喉は呼
吸に鳴りつつ

乙 鳥

おほらかに羽根鳴らしつつ
乙鳥つばくらめ梅雨ぐもる朝
の窓を出で入る

電燈の紐のあたりのつばくらめ忘れてあれば
鳴き交しけり

讀む聲のかつもつれつつ暫しまらくのけはひは友
の居睡れるらし

つばくらめ一羽のこりて晝深し壘におつる糞まり
のけはひも

水 鶏

隣室の友逝く。母なる人急を聞きて郷里より來
訪せらる

壁越しの姫が聲は亡きあとの室を訪ひきて歎
かふらしも

たらちねの母なりければ島の院に死なせし命
の短きを言ふ

おのが身の悼まるるがに亡き友が母なる人の
挨拶を受けぬ

畑つくり巧みなりしよ遺されしトマトの畠に
佇ちつつおもふ

初七日の日隣室にてささやかなる回向をいと
む

南無大師遍照金剛の繪すがたに友が俗名を添
へて灯ともす

梅雨ばれの夕べをながき讀經よきやうのこゑ襖はづせる縁にゐて聞く

おのおのに菓子すこし貰ひ歸りゆき一七日のことははてたり

事はてて歸る弔者の跽音に義足のきしみのありて遠のく

初七日の友が供物くもつの枇杷の實をむきつつをれば水鶏くひな鳴きつぐ

荒^あまし^まし^しき^き起^た居^ちなり^なり^りしも^しこの^こ夜^よを^をば^ば廁^せにも^もた^たた^た
す^す咳^せき^きも^もせ^せす

白 粥

衰へし腸のいたみに　ひさしくも頂く白粥
醫局よりの許可傳票　炊事場に届けば　この
島の飯の器の　飯盒の蓋に盛れるを　舎の人
の交るがはるに　運び下さる幾年の　雨の日
は雫滴たり　風の日は散りこむ松の葉　時に
うすく或は固く　かにかくに甘うまからねども
げに幾人の頬ひに　頂く粥ぞこの白粥は

反歌

飯盒の蓋に冷えたる白粥のうすきにはひに明
し暮すも

蹠 音

蹠音は外の面をゆき過ぎ 附添の友は歸らず
五時の鳴りやがて六時のラヂオなる唱歌
は歌へど 盲ひ我が夕餉のすまぬ ひもじさ
に思ふともなき 遠き日の妻が怨言 わが晩
き歸りを言ひき 枇杷の果の窓にあからむ
共棲は短かかりしよ 癒えてこそ歸るべかり
し その後の二年三とせの いつしかも十年
にあまる 今ほもよ 生きて見るべき我とは
待たじ

送 別

隣室に年久しく住み合せたる松岡茂美君の歸省
を送る

まづ一つと我が手にとらす饅頭のささやかに
して君を送るか

この島の骨堂にして再びを逢はなむと言ふた
はむれならず

防空演習の警笛^{サイレン}ひびく朝の縁にまた會ひがて
ぬ人と別れぬ

乳 臭

あやされて笑ふこゝろ音も乳の香もこの島にして
見まのめでたさ

片言のこゑの清すましさかたゝ我抱まきねと言はれ
て見まをおそれぬ

ありし日の吾兒がおもみの覺ほゆるこの片言
ぞ乳の香にしむ

歸 雁

○わが骨の歸るべき日を歎くらむ妻子等をおも
ふ夕風ひととき

春ならば襖ひらきて通夜の座に白木蓮しづく
闇を添ふべし

その夕の老松原の塚ふかくとどろとどろに神
もはたたけ

秋ならば庭の葡萄の一房のむらさきたかき香
を供養せよ

冬ならば氷雨もそそげ風も鳴れ冷たく暗き土
に還らむ

春至らば墓の上なる名なし草むらさき淡き花
を抽くべし

秋まひる犬えびづるの實の白みつぶらつぶら
に子等を唆るや

曼珠沙華くされはてては雨みぞれそのをりふ
しの羽かぜ囀り

氣管切開

異狀注射

夜中異狀あれば看護手出張して應急の手當をなす。之を異狀注射とよぶ。或夜激しく胃の痛むことありて、二度までも當直の看護手を煩はす

胃袋の疼^{いた}みのやめば胸の頭^づの諸々のいたみなべて収まる

身體ぢゆう何處にも残る疼みなく此夜の明を眠たくなりきぬ

麻痺

癩の兆候は麻痺なり。四肢のさきよりひろがる知覺麻痺に、針にて刺すも火にて焼くも更に痛みを覺えず。次第に募れば全身の皮膚粘膜を犯し、遂には、舌咽喉眼球にも及ぶ。癩の最後の症狀も亦麻痺なり

朝醒めて指に見つけし火ぶくれの大きからぬ
は憎からなくに

痂かさぶたの剥がれしあとに具はりて指紋文あやなすこの
いみじさを

朝明をもよほす悪寒をかんにたづぬれば人差指に爪
ぞ失せたる

いつしかも脱たげ失うせてける生爪なに嘗なむればやさ
し指の圓みは

指およびより肘ひじにひろがる火ぶくれの己おのれがこの手ぞ
ゆゆしかりける

×

耳の孔さぐらるるときともしくもここに残り
て痛覺はあり

しろがねの針をたつればしかすがに眼の球に
潜む痛みは厳し

鼻

鼻翼萎えて年久しく通ずることなかりしが、たま
たま人に教へられて紙巻煙草の吸口を挿むに、片
方は潰えつくして用をなさざれど、残る一つは幸
に氣息を通ず

挿す管の鼻よりかよふ息の根のこのめでたさは
幾年ぶりぞ

おのづから出で入る息の安けさや鼻に挿した
る管は鳴るとも

鼻ありて鼻より呼吸のかよふこそこよなき幸さい
の一つなるらし

されどもと身に具はるものならねば

息づけば鼻に挿したる紙筒のかすかに鳴りて
眠りがたしも

喉

病は喉頭に及び聲の腹れてより筆餘、この頃に至りてやうやく呼吸困難を加へ、深夜の乾氣に咽せ
ては屢々氣息を絶つ

起き出でて嗽ぎしはぶく眞夜の縁隣の室に心を置きつつ

○
幾たりのかたゐを悶え死なしめし喉の塞りの
今ぞ我を襲ふ

辛くして吸ふなる息を咳きに咳くこのひとと
きぞ命がけなる

總身の毛穴血しぶき諸もろの眼のはじけ果つべし
しかも咳きに咳く

折から防空演習中なりければ

警笛サイレンは夜天に鳴れど鳴り歇とどめどい這こひ轉ころ伏ぶし
わが喘せぎ咳く

根かぎり咳きしはぶけど乾びたる痰のねばり
よ喉をはなれず

刻々にけしきを變ふる死魔の眼と咳き喘ぎつ
つひた向ひをり

人皆の眠りひそまる夜の底になにの因果をわ
が咳きやまぬ

二十億の他人の息のかよふともただるる喉に
わが息は熄む

咳く咳を悶搔もがきつくして横たはるこのひとと
きの黙もだの虚しさ

夜一夜を咳きて明せばうつうつと晝はひねも
す腹空きなさぬ

うつうつと眠るともなき日の暮を母が聲のす
夢としもなく

夜毎四度五度を起き出でてしはぶき嗽ぐにもな
れつつ

含み鳴く夜鳥の聲のかそけさを咳き咽びつつ
聞きとめてをり

さやかにはえ鳴かざりけり夜の牙えに聲をふ
ふむは何の鳥かも

夜な夜なを嗽ぐならひの縁先に蟲の鳴く音は
ともしくなりぬ

辛くして息の根通ふ喉の孔に沁みて夜寒は牙
えまさりつつ

癒ゆるなきただれなりとか息づまる喉鳴らし
つつ深夜を寢ねず

なりゆかむ果は思はず吸ふ息の安らふ暫しを
眠らむとすも

この冬はこの冬はとをおそれつつかそけき命
を護り來にけり

朝

明六つの鐘は鳴りいでから風の一夜は明けぬ
起出でて何とはなけれ息づまる喉のた
だれに咳き喘ぎ寢ずて明せば健かに人の
とよもす朝音あさねは宜よろしも

入 室

氣管切開のために重病室に入る

載せられて擔架に出で來ぬわが室をめぐるけ
はひは聞きのこしつつ

病室の扉口と思ふおもりかに額にせまる石壁
の冷え

今日よりのこの六尺のわが天地寢臺のくぼみにそひて長まる

這入り來てひた咳きに咳くひとしきり此室の氣の我には薺えびさ

臥ねてをれば片面にあかる窓の下に迫れる海は今日をひそまる

大阪にて育てりといふ十あまりなる少年、肺結核を併發してすでに聲も腹れりたりしが、入園以來月餘をこの病室に送りて、とある夜をひそかに致たまる

しまらくを足音はみだれ亡骸の運び去られて
また音もなし

わが眼にも灰白みつつ遺されし寢臺に今朝の
日はあたるらし

明暮を隣寢臺にも食ひし童吾一は昨夜を先
立つ

氣管切開

高々と手術の臺に置かれたり噴く湯けむりの
音のもなかを

氣管切開はじまらむとす手術臺めぐらふ人の
黙もだしき暫し

氣管切開てふ生きの命のうつろひを見つめて
は居り怖れもしつつ

切割くや氣管に肺に吹入りて大氣の冷えは香料のごとし

幾夜を喘ぎあかして氣管切開をはれる臺に睡氣さし來ぬ

このままにただねむりたし呼吸管いで入る息に足らふ命は

また更に生きつがむとす盲我くづれし喉を今日は穿ちて

喉穿りて横たはる夜の素硝子の窓にはららぐ
霰ひとしきり

うつうつと眠りつ醒めつ夜もすがら附添ふ人
の身じろぎを聞く

呼吸管かよふ息音は身にしみて幽けくもあれ
や深夜^ふ牙^よえつつ

まともなる息はかよはぬ明暮を命は悲し死に
たくもなし

父なる我は

子も妻も家に置きすて 天刑の疫えびらに暮るる
幾とせを くづれゆく身體髮膚に 聲あげて
笑ふ日もなく いつはなき熱のみだれに 疹
きては眼をもぬき棄て 穿てども喉のただれ
の 募りては呼吸いきも絶えつつ 死しはあへぬ
業わざ苦くの明暮 幾人はありて狂へり 誰れ彼は
縊れもはてぬ ながらへて人ともあらず 死
に失せて惜まるるなき うつそみの果にしあ

れど　あが父の今か歸ると　そが母も共に待
つらむ　吾家なる子等をおもへば　壞えし眼
の闇もものかは　世にありて人の測らぬ　歎
きをもなげかむ　惧れをも散ておそれむ　天
國はげに高くとも　地獄こそまのあたりなれ
次ぐ夜の涯は知らねど　副ふ魂たまのかぎりは
往かむ父なる我は

朔

おほかたは命のはての歌ぶみの稿を了へたり
霜月の朔

かたる我三十七年をながらへぬ三十七年の久
しくもありし

第二部

醫

草なる空想の飛躍でなく、まして感傷の横流でなく、刹那をむすぶ永遠、假象をつらぬく眞實を覺めて、直観によつて現實を透視し、主観によつて再構成し、之を短歌形式に表現する——日本歌人同人の唱へるボエジイ短歌論を斯く解してこの部の歌に試みた。

その成果はともかく、一首一首の作歌過程に於て、より深く己が本然の相に觸れ得たことに、私はひそかな喜びを感じてゐる。

夜

夜な夜なを夢に入りくる花苑の花さはにあり
てことごとく白し

更くる夜のおそれをお白く咲きひらき夢にはさ
むき花甕を巻きぬ

ひとしきり灯あかりのをちに露をよぶ黒松属のこゑ
をおそるる

かたはらに白きけもの
の睡る夜のゆめに入り
来てしら萩みだる

風の夜のまことしやかな
暗がりを聲ばかりな
る賑はひのゆく

己が吹く笛の音いろをうと
みつつこの夜の更
に聞く聲の莫なさ

この夜をば我夜とたのむ
灯を掲げ絶えてひさ
しきもの言ひもしつ

脈鳴りの絶えつつねむる幾い夜よを聞にめぐり遭
ふ聲音もなし

天

大空の蒼ひとしきり澄みまさりわれは愚かし
き異變をおもふ

蒼空の澄みきはまれる晝日なか光れ光れと玻
璃戸をみがく

蒼空のこなにあをい倅をみんな跣足で跳び
だせ跳びだせ

搔き剥がしかきはがすなるわが空のつひにひ
るまぬ蒼を悲しむ

涯もなき青空をおほふはてもなき闇がりを彫^え
りて星々の棲む

ひとしきり物音絶ゆる簷^{のき}をめぐり向日葵を駭^{おそ}
らす空の黝^{くろ}む

斜 面

ある朝を白む日暈はひとしきり顛頂めかけて
麥笛を吹く

ひたぶるに若き果肉をかがやかす赤茄子畠に
やすらひがたし

飛びこめば青き斜面は消え失せてま下にひろ
がる屋根のなき街

蟬の聲のまつただなかを目醒むれば壁も疊も
なまなまと赤し

わたる日のくるめき墮ちし簷ふかく青き毒魚
をむしりて啖ふ

白き手の被害妄想をのがれくる空にまつ黄な
る花々尖る

圓心の一點しろく盲ひつつ狂はむとするいの
ちたもてり

狙ひよる蛇の眼もなく斬りかかる狂人もなく
ダアリヤ赤し

色あをき果肉の肌にもれつつ世にあきれた
る夢は見てゐる

銃口の楊羽蝶はつひに眼じろがすまひるの邪
心しばしたじろぐ

赤茄子の落つる日なかをうつつと海魚の肌
の變色は見ぬ

無花果の體えて落ちたる夕まぐれかるときを
我なにと言ひけむ

まのあたり向ひの坂を這ひあがる日あしの赤
さのがれられはせぬ

紙襖はらひて高き蚊帳をつり生れ來し日をや
すらがむとす

こもり沼のまひるの陰りひとこゑを鳴きてや
みしは何の聲とか

海鳥のこゑあらしおもひでの杳さほきに觸る
る朝のひととき

かたくなに怨りを孕むけどもの赤みだつ眼
を刎ねかへしをり

晝も夜も慧まかしくひらく耳の孔ふたつ完き不運
にゐるも

いつしかと我に似かよふ木の椅子の今朝はふ
てぶてと我を見据ゑぬ

脱けおちて木の果は白し音もなし照る日の光
立ちわたりつつ

身がはりの石くれ一つ投げおとし眞晝のうつ
つきりぎしを離る

寂

ひとしきりもりあがりくる雷雲のこのしづけ
さを背^{うへな}はむとす

いつの世のねむりにかよふたまゆらかまひる
しづかに雷雲崩る

星
宿

星の座を指にかざせばそこに散らばれる
譜のみな鳴り交す

昨日こそ我の過來しかの空に今宵光るはなに
の星かも

まなぶたに夜空の星を塗りこめて吐きかへし
をれば夢うつくしき

脊ばしらをさかのぼりくる眼を放ち空の香き
に神々を彫る

星の夜のこの大空を虹色にわが吐く息は尾を
曳きてあれ

砌

あらぬ世に生れあはせて今日をみる砌かきの石は
雨にそぼてり

日はあがり月はかたむく世の隅に昨日の檻かぎ襖
を身にひき纏ふ

もの音の絶えてしまひし日のさかり壁にむか
ひて我のねむりぬ

竹林にひとつの石をめぐりつつ言ふこともなきしばしなりけり

床したに鼠のかじるもの音も晝のおもひは悔しきに似つ

踏みしだく茨にうすき血を流し隈なき聲をのがれむとすも

夕づけばしづむ遠樹の蟬の聲なにかもしつくして死にゆくはよけむ

天國も地獄も見えぬ日のひかり顛頂をぬらし
て水よりも蒼し

青草に來りやはらぐひとときも何處いづくにか眞紅
の花々は咲け

われの眼のつひに見るなき世はありて晝のも
なかを白萩の散る

軌

息の緒の冷えゆく夜なりまどろみつつすでに
地獄を墮ちゆくひととき

いつしんに耳をすましてあきたらぬ頭蓋の奥
をぬすみみんとす

室々に背をむけてゐる影いくつ夜の敵意はい
つかな熄ます

かぎりなき命と聞けばあなかしこ靈魂てふに
化けむはいつぞ

愛執あいしよくは海に消えせぬ翳かげとなり三半規管鳴りひ
そまりぬ(解剖室)

失せし眼にひらく夜明よあけの夢を刷あき千草の文あひらを
雨あしの往く

軌跡

シルレア紀の地層は杳さほきそのかみを海の蠍さそりの
我も棲みけむ

路々にむらがる銀の月夜茸蹴ちらせばどつと
血しぶきぞたつ

コロンブスがアメリカを見たのはこんな日か
掌をうつ蒼い太陽

引力にゆがむ光の理論など眞赤なうそなる地
の上に住めり

ひたすらに白きおそれをかき抱く母鳥の眼を
今日ぞ見ひらく

いつの世の魚貝の夢かをりにまだらに青
き殻をあらはす

降りつもる落葉のこゑにうづもれて翅に生れ
む夢は見てゐき

あ
た
り
に
て
間
な
く
合
圖
を
す
る
も
の
あ
り
樹
を
も
揺
り
ぬ
掌
を
も
ひ
ろ
げ
ぬ

奈落

明暮をあだにおろかに思はねど屍となる身ぞ
臭ふなる

今日も暮れて五臓六腑はとりどりに音なき夢
を積みくづしする

この空にいかなる太陽のかがやかばわが眼に
ひらく花々ならむ

空の青に眼まなこを凝らすならひにも見放されつつ
夜ごと眠りぬ

背も腹も褌ちんちんせつくしたる影ひとつ晝にも夜に
も逐ひたてらるる

抽斗ひきだしなるむかしの錢も臍の緒も我にきはまる
幾世の命ぞ

靈魂に遺らむ臍のありかなど皺くちやな頭に
かんがへあぐむ

しあはせな歌はおもへど目に見えて夜毎を地獄に墮つる夢ばかり

不運にも置去られつつ眼のたまに鍼はりなどたてて明し暮すか

こんなとき氣がふれるのか蒼き空の鳴をひそめし眞晝間の底

鑄

いづくにか日の照れるらし暗がりの枕にかよ
ふ管絃のこゑ

起きいでて手さぐる闇にひとしきり三十二相
の眼鼻あらたか

つ の り くる 如たと法ほうの 闇 に ま み れ つ つ 身 より く さ
れ し 鑄 搔 き む し る

霧も灯も青くよごれてまた一人我より不運な
やつが生れぬ

起きいでて厨にさむき水をのむ深夜のおもひ
飢うるがごとく

ふうてんくるだうそびやくらいの染色體わが
眼の闇をむげに彩る

總身の毛穴を襲ふ窒息をもなかに醒めて鳴を
ひそめぬ

目醒むればいつも一時の鳴つてゐるそんな夜
更をまたも醒め來ぬ

冴

夜一夜に壁の羽蟲を刷きおとし地平きびしく
むき直り來ぬ

額を搏つ晨氣高らに星々をかなぐりすてし空
に居むかふ

石に凍む音ねいろはあれど今朝の朝の冴は須由
に鳴りかはし熄やむ

山なみを壓しかたむけて迫り來る空のふかき
に吸ひあげらるる

あらはなる虚空こゝろの距離をいただきて野鳥のあ
そびつひにおごらす

巷

ある朝の白き帽子をかたむけて夢に見しれる
街々を行く

踏む整せいがまばゆくてならぬ巷には夜霧のにご
りあとかたもなく

あるときは思はぬ窓に日のさして青む大氣の
街迷ひ行く

窓ごとに黄金きんのロマンは灯あかりつつ迷ま兒ごわれに
ほほゑみかけぬ

あらはなる轍わだかまのあとをあゆみつつ許ゆるさるまじ
き悔くとなりきぬ

人ひとごみにおしつおされつなにがなしに臍へそのあ
る身みが儂はかなまれける

まんまんと湛たふる朝あの此處こゝかしこ白しろくにごし
て娑婆しゃばがこゑあぐ

足音の絶えし巷に目醒むればかぎりなき花々
闇にひそまる

捧げゆくうすきグラスにしたたらすある日の
微笑ある夕ゆふの嘘

臍のある腹をつつみて今日も往き人だかりに
は爪だちて見つ

あらむ世を商賈の類に生れきて色うつくしき
酒はひま霽がむ

煙突ありあがる煙ありめぐる日にみじかき影
を地ちにおとせり

年輪

伐られたる根株に白き年輪は脂をふきつつ枯れゆくらしも

かたつむりあとを絶ちたり篋の午前十時のひかりは縞に

わが指の頂にきて金花^{たま}蟲^{むし}のけはひはやがて羽根ひらきたり

うつらうつら眞晝をとざす暗がりに間なく滴
る樹脂ツツジの香を聞く

暮れあをむ空に見えくる星一つさし伸ぶる手
に著きてまた一つ

とある夜のしづけさ深くしみ入りて髓ツツジに埋れ
しかなしみを整さす

暗がりに撒きちらさるる白き餌をたはむれな
らす啄ツツジみあさる

かさかさと爪鳴らしつつ夜もすがら疊にみだ
るる花びらを摘む

昨夜の雨の土のゆるみを萌えいでて犯すなき
青芽の貪婪は光る

傷つける指をまもりてねむる夜を遙かなる湖
に魚群死にゆく

譚

うつらうつら花野のあかり隈もなきうつろひ
のなかに我をうづめぬ

はてもなくかげろひしきる野のはてに晝は遠
のく登音ばかり

心音のしましおこたる日のまひるうつつに花
は散りまがひつつ

さくら花かつ散る今日の夕ぐれを幾世の底よ
り鐘の鳴りくる

まじろげば一つのこれるたんぼぼの胚子とび
去りながき日暮れぬ

まゐらせてあかりはにほふ金無垢の本尊めで
たくあぐらゐたまふ

ひきまとふ茵しほねは肌に消えゆきて宵千金の今を
わすれぬ

ある朝け五層の天主は燃えおちて池心にねむ
る白華びやくくわ一輪

蕭せうたけく竹の節より生れ來し昔むかしのいつ
はりのよさ

いちめんの枯木に花を咲かせつついつの夜ま
でを我の夢見し

晝

海ぞこのかがやくばかり銀の錢ばら撒きをれ
ば春のまひるなれ

みなそこに小魚は疾し全身の棘ことごとく抜
け去る暫し

白き猫空に吸はれて野はいちめん夢に眺めし
うすら日の照り

薔薇苑の薔薇ことごとく黝くろみてまひるの空に
をはる夢なる

薔薇ひらき揚あ羽げ蝶はみだるる日のまひる一碧の
空はわが明をおほふ

遅
日

あかつきの夢に萌えくる齒朶わらび白き卵は
我を怖れぬ

黒き猫黄なる猫などたはれつつ小雨すぎたる
庭暮れむとす

人蔘の黄なる肌のものうさかときのまのわが
想ひを覗く

ちひさなる抽斗^{ひきだ}あまたぬき竝べあれやこれや
に思ひかかはる

曉

しんしんと梧桐わづなの幹をさかのぼるしづけさありて夜氣はしりぞく

うつくしき夢は見かねてあかつきの星の流れにまなこうるほす

うろこ雲高くうすれてある朝の果肉は白し齒にきしみつつ

思ひきり不敵な夜々をたくらめど星の失せて
は空の青み來^く

あかつきの窗をひらけば六月の白い花びらが
手のひらに降る

そら鳴るは白楊ならしあたらしき季節に吹か
れてこよなく眠る

地の底の黄なるころもを脱けいでて翅にひら
く感覺を踐^かむ

翳

おちきたる夜鳥のこゑの遙けさの青々とこそ
犯されるたれ

こともなき眞晝を影の駈けめぐり青葉のみだ
れはいづこにはてむ

腸のあたりうすきいたみのをりをりに晝ひと
しきり若葉は募る

ひねもすを青葉のてりにきほひつつくたくた
になる慾念なるも

水底みづそこに木洩れ日とほるしづけさを何の邪心か
とめどもあらぬ

囁りの聲々すでに刺すごとく森には森のゐた
たまれなさ

まのあたり山蠶やまごの腹を透かしつつあるひは古
き謀叛ひそかをおもふ

てり翳る晝をこゑなき木下路脱けいづるとき
日は額ひたいを搏つかてり

たそがるる青葉若葉にいざなはれ何に墮ちゆ
くこの身なるべき

頤ほそがひにうすき刃の觸るるとき何時の葉すれかう
つつを去らぬ

おのづからもの音絶ゆる窞あなぬちにある日わか
葉のほひときめく

夜をこめてかつ萌えさかる野の上
にいちめん
の星はじけて飛びぬ

新緑の夜をしらじらとしびれつ
つひとりこよ
なき血を滴らす

聴^きしかる星のたむろをのがれきて
若葉のみだ
れ涯なきをあゆむ

暗すまの壁にむかひて明暮を
外^と面にきほふ青
葉は知らず

簷のきをめぐる青葉若葉にうづもれて今朝は眞白
なるペーヂを披く

うづたかき簷の青葉を揺すぶつて覗見すれば
巷に日の照る

跋

明石海人君の歌集「白描」が改造社の厚意によつて世に送られることになり、著者並に出版者の懇請によつて、跋文を書くの光榮を擔つた事は、私の感激に堪へないところである。

抑々私と明石君との關係は、私が熊本九州療養所から當長島愛生園に轉じた昭和十一年一月からであるが、其の頃君は既に此の島の病友達によつて組織されてゐる、長島短歌會の重鎮として、絢爛たる作風を示してゐた。爾來私が長島短歌會の指導者の席を汚す様になつたが、君は私の鼎の輕重を問ふことなく、虚心坦懐に互に研鑽の途を勵んだのは快よい思出である。君の作歌熱は實に驚異に値する程であつ

て、夜中眼が醒めると晝間の歌を再考して夜を明すことが屢々であり、又或時の短歌會で「難解の歌をも努力して鑑賞せよ」と後進を説破してゐるのを聞いた事があるが、私も君に與へるよりも、與へられることの方が多かつた事を、今しみじみと思ふ。

明石君の卷末記を讀まれた人は、其の作歌經歷の非常に短いのに一驚されるであらうが、此の歌集の殆ど大部分が視力の衰へかけてから以後の約三年間の作である事は、全く其の俊敏なる才能と、常人の及ばない努力の結果である。明石君の短歌の價値に就ては、既に「新萬葉集」に於て衆人の認むるところであり、私が此處に紹介する要はないが、其の環境に就て明石君が自傳風の卷末記を書く筈であつたが、最近頓に加はつた衰弱の爲に充分の事が書けないので、彼の身邊をよく知つてゐる私が、聊か代辯さして戴きたいと思ふ。

明石君は本年三十八歳で濱松の生れであり、某中等學校を卒業し、美術及び音楽にも造詣が深い。二十八歳の頃から癩を發病し、卷中の歌にもある通り、妻子とも生別離苦の悲劇を具さに體驗し、療養の爲に各地を轉々した後、昭和九年以來此の島を最後の安息所として求めたのである。幸に此の國立の療養所は救癩事業の先覺者である光田健輔先生を中心として、千數百の同病者が營む樂園であつて、文化施設が豊であり、長島短歌會と云ふ好適の培養地を見出して、其の才幹を遺憾なく發揮することが出來たのは、せめてもの幸と云ふべきであらう。

明石君は非常に多才であり、象徴的な詩的感覺を多分に持つて居り、詩も中々高級のものを作るが、前川氏に依つて其の詩的短歌を見出だされ「日本歌人」の同人として重きをなしてゐる。一般定型律の短歌は

主として私の關係してゐる「長島短歌」誌上に發表して來たのである。昭和十二年八月發行した長島短歌會の合同歌集「楓蔭集」には、卷頭に八十二首の短歌と長歌一首を發表してゐる。

癩者に三大受難があるが、それは發病の宣告と、失明と、氣管切開とである。後二者は發病後十年乃至十五年餘の後に來るものであり、重病者の中では失明に陥つてゐるものが二十五%、氣管を切開せる者が5%、失明と氣管切開とを兼ねてゐる者が3%位居る。癩の盲人は癩性浸潤の爲に、手足の知覺が侵されて點字も讀むことが出來ず、總てにかんが悪く不自由なことが夥しい。明石君は失明生活既に三年、本歌集に聽覺の歌と、追想の歌が多いのは其の爲である。昨年十一月には遂に病氣の爲に喉頭が閉塞しさうになつたので、私の手で外部から喉頭の下の氣管を切開して、金屬性の呼吸管をはめて辛うじて呼吸

を續けてゐるのである。之程の苦難にすら堪へて君は多くの歌を作つたが、其處に偉大なる精神力の飛躍を見ることが出来る。

日本は世界の一等國であるが、全國に猶三萬餘の癩患者を擁して居り、現在漸く八千人を隔離救護してゐるに過ぎない。癩は遺傳でなく傳染病であるから、隔離によつて根絶することの容易である事が解り切つてゐても、其の實行が出来ない現狀である。畏くも

皇太后陛下の御軫念を辱うしてゐるが、此の方面の施設が比較的遅々としてゐるのは、如何なる理由であらうか？ 之には種々なる原因があるであらうが、古來我が國には病者を嫌惡し卑しめる風習のある事が、其の重大なる理由の一つであると思ふ。遍路となつたり、或は路傍に物乞をする病者も、自ら好んでその道に墜ちたのではない。私は總ての因習と偏見とを去つて、病者の人格を認めてやることが最上の

同情であつて、其處から眞實の救癩精神が湧き起るものであると信ずる。病者も亦自ら卑下することなく、其の人格を築いて行かねばならぬ。而して文藝は一般社會人と病者との精神的握手法として最適のものであつて、癩院の文化運動は重大なる問題であり、全國の療養所が之に力を注ぎつつある所以である。私が十年前熊本九州療養所で始めた短歌運動は、此の癩院文化運動の重要な部門として、其の後全國の癩院に澎湃として興り、五百に近き癩歌人の輩出を見るに至り、それれ機關誌を持ち、又中央専門誌上に進出して精進を續けてゐるのである。

昨年一月「新萬葉集」第一巻が發行せられ、明石君の作が堂々と多量入選をなし、全歌壇の激賞を受くるに至り、私は全く驚喜せざるを得なかつた。續刊さるる「新萬葉集」に續々と癩友達の名が見えて、遂に

五十三名百八十餘首の入選を見る事が出来たので、病友は歡喜し、其の周圍を護る我々も感謝を覺えたのである。而して此の「新萬葉集」が機縁となつて、今回改造社の厚意に依り此の「白描」發刊を見るに至つた事は全く夢と云ふより外はない。之は關係各位の厚情の賜ではあるが、私は全國の癡歌人達が「眞實なるもの、實力ある者は必ず酬いらる」と云ふ信念を持つて、雄々しく立ち上つてくれる事を衷心から熱望するものである。又縁あつて本書を繙かれる一般人士が、癡者の背負へる悲惨なる運命と、言語に絶する團體的苦難とを、充分認識せられて、人間的握手を惜しまれず、國辱的な疾患を一日も早く祖國より無くする事に、協力せられん事を翹望して歇まない次第である。

改造社から歌集の原稿整理を懇願して來たのは、昨年五月頃のことであつたが、萬事友人の手を煩はさなければならず、一々口述して筆

記して貰はねばならないので、其の苦心は全く他の想像以上であつた。且つ藝術的良心に嚴肅なる君は一言一句も忽にしないので、豫想以上の時日がかかつた。明石君は全く、本集の爲に鑢骨碎身の苦を舐めて少なからず心身を消耗したのである。氣管切開をすれば發聲が極めて困難となり、且つ合併症を惹起し易いので、向後の君の闘病生活は益々困難を加へるであらうが、願はくば江湖の同情によつて、其の餘生が少しでも明るむ様に祈念して歇まない。

最後に本集發行に就いて紹介の勞を採られた下村海南先生、並に病者にとつて破格の犠牲出版を企てられし山本社長に滿腔の敬意と謝意を表する次第である。

昭和十四年一月廿五日 國立癩療養所長島愛生園醫官室にて

内 田 守 人

作者の言葉

私が歌を習ひはじめたのは昭和九年頃で、當時視力はもう大分衰へてゐたが註釋を頼りに萬葉集などに讀耽つた。園内には長島短歌會と云ふ同好者の團體があつて、之によつて作歌の便宜と刺戟とを受けたことが尠くない。昭和十年一月水麴に入社させて頂き、同じく八月日本歌人に轉じた。この頃には全く明を失つて讀むのにも書くのにも人手を借りなければならなかつた。

此の間、日本歌人社の前川佐美雄氏は癩者の私を人間として認めて呉れたのみならず、何時も励り勵まして下さつた温かい御氣持には感謝の言葉もない。

第一部白描は癡者としての生活感情を有りの儘に歌つたものである。けれど私の歌心はまだ何か物足りないものを感じてゐた。あらゆる假裝をかなぐり捨てて赤裸々な自我を思ひの儘に跳躍させたい、かういふ氣持から生れたものが第二部醫で、概ね日本歌人誌に發表したものである。が、仔細に見れば此處にも現實の生活の醫が射してゐることは否むべくもない。この二つの行き方は所詮一に歸すべきものなのであらうが、私の未熟さはまだ其處に至つてゐない。第一部第二部共に昭和十二年乃至十三年の作で、中には回想に據つたものも少くないが、西郷さんの銅像の紙礫も溢れた病友の袷の縞目も、私にとつては今朝の粥の味よりも鮮やかな現實である。

この集の草稿の整理は、氣管切開の手術を受けた前後を通じてなされたので意に滿たない點が少くないが、今は健康が許さないので満身

創痍の儘世に送るの外はない。

本書は、下村海南、山本實彦、兩大人の御厚意と、本園々長光田健輔、醫官内田守人兩先生の御盡力によつて、世に出ることになつたもので、茲に謹んで謝意を表する次第である。また、目の見えない上に聲の出ない私を扶けて、煩瑣な草稿の整理に當つて呉れた病友、小田武夫、春日英郎、山口義郎三君の勞苦にも深く御禮を申上げる。

此の小文でもつと詳細に私の周圍を紹介したいと思つたが、既にその勞に堪へないので、常に傍にあつて私の心身兩面に肉親の慈みの眼をもつて見て下さる内田國手に、跋文を御願ひして補つて頂くことにした。

では歌集白描を送る。この一卷が救癩運動の上に、また我々癩者の生活の上に何等かの意義を持ち得るなら、それは望外の幸である。

昭和十四年一月

長島愛生園にて

明石海人